

## 足利市の繊維工業に関する地理学的考察

川 田 陽 子

織物業を中心とする繊維工業は、陶磁器業・漆器業とならび、日本の伝統的地場産業の一つであるが、近年においては経済の国際化、需要構造の変化によって衰退化傾向にあり、地域経済振興の担い手として重要視されなくなりつつある。足利市は我が国でも先進的な機業地域であった関東機業地域に属し、幾多の経済変動に伴う構造変化を遂げたが、近年における衰退は甚だしく苦しい対応を迫られている。今回の調査では、足利の繊維工業の発展・衰退の原因と今後の動向・対策を明らかにすることを目的とする。

足利織物は遠く奈良朝時代、朝廷に『あしぎぬ』を献上、また鎌倉時代には当時の執権北条氏が愛用した染織物となった。足利織物は明治30年頃に輸出のピークを迎え、特に大正から昭和にかけて生産された『足利銘仙』は全国的にその名声を博し、一世を風靡した。昭和30年頃には加工・整染技術を生かした各種の絹・人絹・毛・麻・合織等の小巾織物が主に生産され、織物業の繁栄が続いた。しかしながら日本の産業構造が次第に軽工業から重工業、更に先端技術産業へと発展・進行すると、足利織物も以前のような繁栄を失い始め、銘仙に代わってトリコット、メリヤスの編立・縫製、婦人・子供服の縫製などが産地の主力製品となった。僅かに残存している織物も今や小幅織物は数えるほどで、ほとんどが広幅織物である。そこで、染色・撚糸などの織物関連業者は次第に足利産地から離れ、独自に他産地の下請けをするようになり、織物業よりも規模拡大した。このように足利産地内部には、様々な織産業が地域ごとに集積し、分布している。各繊維産業の現状・動向をまとめると次のようになる。

### 1. 織物業

現在、絹人絹織物が全織物の30～40%、合成繊維織物が約65%を占めている。そのうち小幅織物では、着尺・袋帯・踊絵羽などが、広幅織物ではカーテン地・住宅素材・マフラー・洋反（主に婦人服）などが生産されている。事業所数・従業者数については、1972年から1989年の17年間でそれ

ぞれ約 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{2}{3}$ に減少しているが、中でも絹織物業の衰退が顕著である。また、足利織物産地の特徴は元機が製品企画をするのみで、製織を全て賃機に任せていることであり、現在元機は80件程で、その他はほとんどが織機5台以下の零細な賃機である。元機の大部分は市中心部の本庁管内に、賃機の大部分は西北部の小俣・三和（松田）地区等に集中している。

### 2. 撚糸業

足利では織物生産額よりも多く、大規模かつ高生産性をもつ部門になっている。これは他産地の下請けや原糸メーカーの加工を受託するためである。工場は西部・葉鹿・小俣に多い。しかし近年、産業としては急激に縮小しつつある。

### 3. 染色整理業

織物業の衰退に伴い多くの染色業者が廃業したが、足利は元来先染め糸により多種多様な織物を生産していたことから高度な技術を要しており、近隣産地の下請けも行っている。1972年と比較して、事業所数・従業者数ともあまり変化がなく、足利において今なお重要な地位を占めている。

### 4. メリヤス業

1985年において、足利繊維工業中、生産額第1位であり足利産地内での地位は高まっているが、合織の進出・安価な輸入品等により押され、現在は非常に厳しい状況下にある。今後は、スポーツアパレル等にも製品を拡大し、立ち直りを図ろうとしている。

以上のように繊維全般が厳しい状況下にある現在、足利産地内部には2つの対立する意見が存在する。「織物産地」としての復活にかける積極的意見と「時既に遅し」の消極的意見である。前者の立場では織物の高級化・新商品開発等を基本的対策に掲げているが、実行に移すのは困難である。「足利織物＝普及品」のイメージは早々拭えない。今後は「総合繊維」産地として飛躍し、その中で残存の織物を存続し育成することが足利産地が生き残るための方策であると思われる。